

テーマ別研修

「実践事例から学ぶ 園の特性に応じた保育」 —園の実情に即した活用に向けて—

外国人幼児等が安定して園生活ができるように見通しをもった保育の展開や環境の構成の具体例と、外国人が多く住む地域にある園の積極的な取組例を紹介します。

各園で行う園内研修では、ここで紹介する実践をそのまま真似るのではなく、園や地域の特性や実情に即して、保育内容や指導方法を検討していただきたいと思います。

この講座を通して身に付けていただきたいことは、これまでの研修で学んだことを総合して考え、保育者自身が多様な考え方を受け止める大切さに気付き「変わる力」と、研修で学んだことを自園の実情に照らして考え保育を「変える力」です。

<本講座の構成>

- 1 外国人幼児等一人一人の特性や背景に応じた保育の展開
- 2 違いを知り、受け止め合う環境の構成と援助の工夫
- 3 外国人幼児等を受け入れている保育者たちの語りからの学び

1 外国人幼児等一人一人の特性や背景に応じた保育の展開

1-1-1 様々な背景をもつ外国人幼児等の理解

1-1-2 様々な背景をもつ外国人幼児等の理解

1-2-1 母語で存分に自己発揮できる遊びの工夫

1-2-2 外国人幼児等がリーダーになれるゲームの意義

1-3 同じ言語を使う外国人幼児等が複数在籍する園における保育の工夫

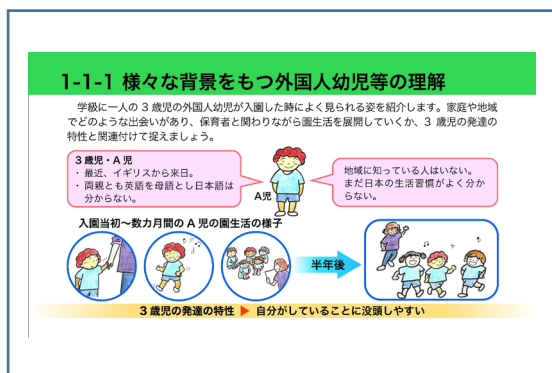
1-4-1 安心から始まる園生活

1-4-2 日本語サポート室における生活と環境

1-4-3 日本語サポート室で経験していること

ここでは、様々な背景をもつ外国人幼児等を受け入れている園の幼児たちの様子や多くの外国人幼児等を受け入れている園の積極的な取組の様子を具体的に紹介します。どのような考えの下に保育の展開を工夫しているかを読み取っていただき、各園の実情に即して工夫できるように園内研修で考えていただきたいと思います。

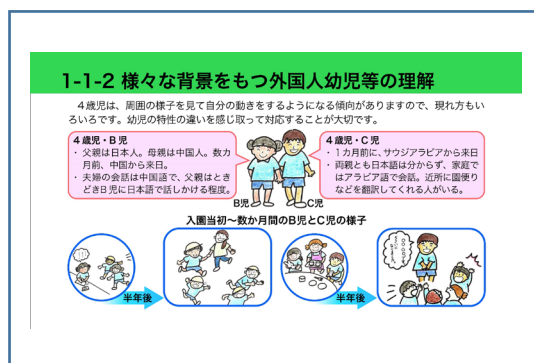
1-1-1、1-1-2 様々な背景をもつ外国人幼児等の理解



入園する外国人幼児等には、様々な背景があります。例えば、3歳児の事例のA児は、入園して初めて日本語に触れました。保育室に入る前に靴を履き替える習慣も、A児にとっては思いもよらず、訳も分からない状況です。日本では当たり前な生活習慣ですが、外国人幼児等にとっては、言語も生活習慣も思いもよらないことが多いことに気付くことが大切です。そんなA児ですが、興味のある積み木を見つけると気が紛れて楽しみ、次第に没頭して遊ぶ

時間が長くなってきました。そして、好きな音楽が聞こえてくると体を動かし、保育者を頼りにしながら段々と園生活に慣れてきました。このように、外国人幼児等の興味・関心や特性、生活の背景、3歳児の発達の特性などを捉えて保育を展開する工夫について、自園に在籍する幼児の姿から振り返ってみましょう。

4歳児になると自分の興味・関心だけではなく、周囲の様子にも目が向き、自分なりの動きをする姿が見られるようになる傾向があり、現れ方はさらに多様になります。動画で紹介している二つの事例の幼児の背景は、全く異なります。保育者は、一人一人の幼児が何を楽しみに感じているか、何をしたいと思っているのか、動きや表情からも幼児の内面を



理解し、その特性に応じた受止めをしながら、それぞれの幼児が自分の思いを表現したり、自己を発揮したりするきっかけをうまく捉えてコミュニケーションの楽しさにつなげていくことが大切です。

動画で紹介したC児は、なぜ友達と一緒に遊びながらも日本語を話そうとしなかったのでしょうか？皆さんで話し合ってみるのもよいと思います。異文化の中で生活をする外国人幼児等一人一人の発達や特性に応じた保育の在り方が多様であることに気付くと思います。

1-2-1 母語で存分に自己発揮できる遊びの工夫、1-2-2 外国人幼児等がリーダーになれるゲームの意義

1-2-1 母語で存分に自己発揮できる遊びの工夫
 外国人幼児等がリーダーになって楽しめるゲームの事例

外国人幼児等は、登園から降園までずっと日本語の世界の中で生活しています。話をしたくてもどう表現すればよいのか分からず、不安でいっぱいの子供もいます。そんな中で、時には自分の言葉で思い切り言葉を発して皆と一緒に遊び、リーダーになれたら、園生活が楽しいと感じ、自信にもつながるのではないかと期待し工夫した保育の展開例です。

ゲームの内容：ポルトガル語と日本語を交えた引っ越しゲーム
 フラフープの色別の島への引っ越しゲーム(赤、黄、青、緑、白)

○外国人幼児がリーダー役
 ○日本人幼児がリーダー役

えっ、〇〇って、何色のごとだけ？

ポルトガル語なら、分かる。簡単!

ポルトガル語だから、リーダーになれる！嬉しい!

〇ちゃん、すごい！ポルトガル語が話せる!

嬉しいけど、面白いリーダーになりたい!

1-2-2 外国人幼児等がリーダーになれるゲームの意義

- 外国人幼児等にとっては、自分の母語で自分の力を思い切り発揮して遊ぶ楽しさや喜びを味わう。
- 喜びや安心感が主体的な動きを生み出すきっかけになる。
- 日本人幼児にとっては、言われている言葉が分からない経験を通して、日頃の外国人幼児等の戸惑いに気づき、相手のことを思いやることにつながる。
- いろいろな遊びや言葉を知り、分かり合う喜びや違いを受け止め合うことにつながる。

Q1 外国人幼児等がリーダーになれるゲームを考えてみよう!
 ・在園している幼児やそのクラスの状態に即した遊びを考えてみましょう。

外国人幼児等にとって、園生活は日本語の世界で、話をしたくてもどう表現すればよいのか分からず不安です。そこで、「自分の言葉で思い切り言葉を発して皆と一緒に遊び、自分がリーダーになれたら楽しいと感じ、自信にもつながる」と期待して工夫した保育の展開例を動画で紹介しています。この遊びの中では、外国人幼児等は自分の分かる言葉（母語）で展開している遊びを存分に楽しんでいます。自分がリーダーになった時には、特に嬉しそうに、指示の言葉を出していました。

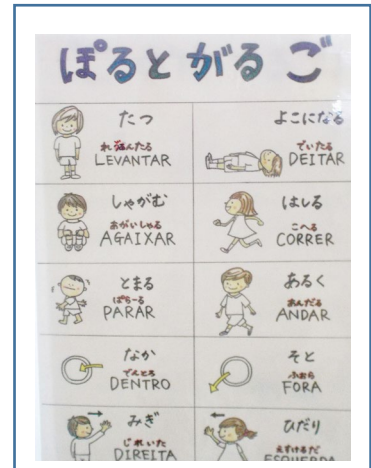
一方、日本人の幼児は、リーダーがポルトガル語で指示を出している間は、何色のところに行けばよいのかすぐには反応できず、ポルトガル語が分かる外国人幼児等の動きを見たり、推測しながら動いたりして、歯がゆさを感じているようでした。この体験は、外国人幼児等がいつも感じている歯がゆさへの気づきにつながると考えます。

このように、日本人幼児にとっても外国人幼児等にとっても楽しく、そして相手への理解や思いやり、自信へとつながる遊びにはどのような工夫が必要かを各園で考えていく必要があります。こうした遊びを考えるときには、外国人幼児等にとっての意義と日本人幼児にとっての意義を確認しながら、様々な工夫をされるとよいと思います。在園している外国人幼児等の発達や母語と日本語の育ち、ルールへの理解や判断力などによってゲームの内容は異なりますので、どのような遊びを保育に取り入れるとよいかを園内で話し合っ、教材研究をするのもよいと思います。

<外国人幼児等がリーダーになって遊ぶことができるゲームの例>

①素早く言葉に反応するゲーム（学級やグループでの遊び）

- ・ 幼児は、リズムに合わせて歩き、保育者が途中で動作を指示する言葉「止まる」「歩く」「走る」「しゃがむ」「立つ」などの指示を出す。 → それに応じて、幼児は指示の言葉通りの行動をとる遊び。
- ・ 外国人幼児等がない園でもよく行われる遊びですが、これを日本語で言ったり、外国人幼児等の母語で言ったりして楽しみながら、動作を表す日本語を覚えるきっかけにしていけることができます。
- ・ このように遊びながら、互いの言葉に関心をもつきっかけにすることができます。
- ・ 動作を示す言葉の例としては、「手をあげる」「手を下げる」「跳ぶ」「回る」「ねじる」「後ろを向く」など、いろいろに考えられます。
- ・ こういう遊びを考えると、外国人幼児等の保護者に教えていただくのもよいと思います。
- ・ また、右の図のようなものを作っておくと、幼児は興味をもって見たり真似たりして、ゲームを楽しめます。
- ・ 慣れてくると、年長児などは難しいことに挑戦するようになります。そうした子供たちの思いを受け止めながら保育を展開することによって、互いを尊重する心が育っていきます。



②外国人幼児等の母国の子供が大好きな遊びを紹介してもらい、皆で遊ぶ。

- ・ 保護者を招いて説明してもらい、一緒に遊ぶのもよいと思います。親子であれば、外国人幼児等も安心して楽しめますし、保護者にとっても園の子供たちに親しみをもつきっかけになります。
- ・ ジャンケンなども国によって違うので、保護者に教えてもらうとよいでしょう。

1-3 同じ言語を使う外国人幼児等が複数在籍する園における保育の工夫

1-3 同じ言語を使う外国人幼児等が複数在籍する園における保育の工夫

それぞれの国の文化や生活習慣を尊重しつつ、互いが気持ちよく生活できるように考えるという基本的な考え方は同じです。しかし、同じ言語を使う外国人幼児等が複数在籍する時には、保育の展開について配慮したいことがもう1つあります。

同じ言語を使う外国人幼児等が複数在籍する園における学級の様子

- ・ 外国人幼児同士で集まって安定し、日本人幼児と関わりにくい。
- ・ 安心してコミュニケーションをとりながら園生活を楽しむことができるが、日本語に触れる機会や覚える必要感が少ない。
- ・ 特に、家庭や地域では母語で生活している幼児にとっては、園での生活が日本語と触れる唯一の機会となることに留意して、保育の展開を工夫することが大切である。

保育者が 場面を捉えて 積極的に関わり 外国人幼児等が日本語を使う機会をつくっていく

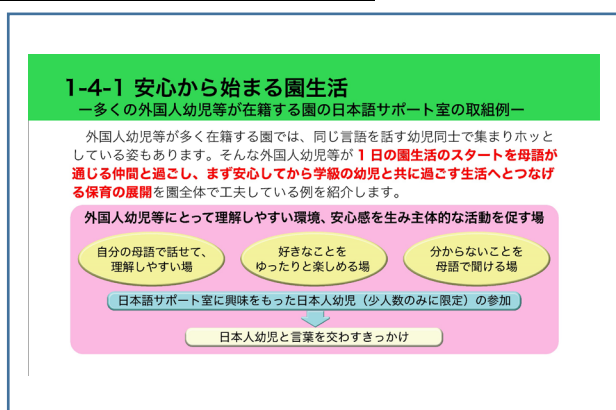
同じ言語を使う外国人幼児等が複数名在籍する園での保育の基本は、これまでの基礎理論研修やテーマ別研修で学んだことと同様ですが、それらに加えて、もう一つ保育の展開について工夫が必要になってきます。当該の幼児が卒園後に日本の小学校に進学する予定であれば、日本語に触れて親しみを感じ、日本語を理解したり表現したりする機会を増やすなど保育者が意識的に工夫し、年

年齢や発達に応じて積極的に取り組む必要があります。

なぜならば、同じ言語を使う幼児が複数名いる場合には、その幼児同士で集まって遊びやすいので、自ずと日本人幼児との関わりや日本語に触れたり使ったりする機会が少なくなり、幼児自身も覚える必要感が薄いので、結果として日本語でやり取りをする経験が乏しくなり、日本語の育ちが促されにくいからです。

外国人幼児等が複数名在籍していても在籍していなくても、主体的・対話的で深い学びを中心とするという基本は変わりませんが、小学校では日本語で話を聞いたり考えたり表現したりして進める学習が中心になります。そこで、園生活に困らなければ問題ないと考えるのではなく、一人一人の幼児の将来、日本での生活を見通した援助も大切です。

1-4-1 安心から始まる園生活

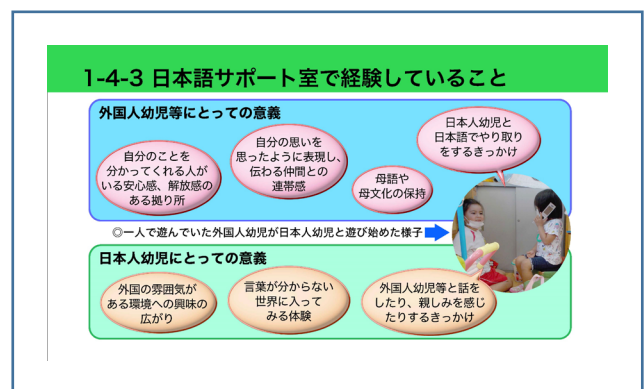


日本語が通じず、園生活に不安を感じている外国人幼児等が多く在籍する園では、同じ言語を話す幼児同士で集まりホッとしている姿もあります。そんな外国人幼児たちが1日の園生活のスタートを母語が通じる仲間と過ごし、まず安心してから学級の幼児と共に過ごす生活へとつなげる保育の展開を園全体で工夫している例を、動画で紹介しています。

この取組例は、同じ言語を話す外国人幼児等が多く在籍する園の日本語サポート室の取組です。同じ言語を話す友達とは楽しく園で遊べるけれど、日本語はなかなか覚えられません。家庭・地域でも母語でコミュニケーションできますが、日本語を理解しないまま卒園すれば、小学校に就学してから学習につまずくことは目に見えています。そこで、この園では、積極的に外国人幼児等がのびのびと生活しながら母語に加えて日本語を学び、日本語で学びを進める小学校に入学して小学校生活を楽しめるように見通しをもった保育を展開しているのです。

具体的には、外国人幼児たちが登園してから1時間は母語でコミュニケーションできる場を設定し、1日の園生活のスタートを「まず安心から」としています。その後は、それぞれが自分の学級に戻って学級の友達との生活につなげていく工夫をしたのです。このサポート室に参加するのは、3歳児以上の希望する外国人幼児等です。外国人幼児等にとって、話したいこと聞きたいことを母語で自由に話して安心できる場と、自分の学級で様々な遊びを楽しむ場を保障することになっています。このような場を設定するには、母語を話せる保育者の確保や場の確保など様々な課題があり、どこの園でもできるものではありません。しかし、この取組の基本「1日のスタートを安心から始める園生活」という発想は、どの園でも考えられると思います。各園で提供できる「安心から始まる園生活」はどのような形か考えていただきたいと思います。

1-4-2 日本語サポート室における生活と環境、 1-4-3 日本語サポート室で経験していること



サポート室には、動画で示したように、ポルトガル語で話すことができる保育者がいて、外国人幼児等が母語でコミュニケーションができます。そして、室内にはポルトガル語と日本語を並列で表記した表示がたくさんあります。例えば、絵を描いたり何かを作ったりするテーブルには、色や形などの名前がポルトガル語と日本語で書かれた紙が貼ってあり、幼児が知りたい、伝えたいと思う時に学べるような環境が工夫されています。幼児が表現したいときに、その言葉を探したり、文字が読めなければ指で差し示すことで伝えたりすることができるようになっています。また、それによって周囲の幼児や保育者が「○○？」と問い返すことで言葉を覚えていくことができるように工夫している環境なのです。

さらに、このサポート室には、外国人幼児等だけでなく、このサポート室に興味をもっている日本人幼児も入室して遊ぶことができます。しかし、自由に入室できるのではなく、1日に数名に限定しています。これは、サポート室で活動する外国人幼児等が母語で安心して園生活を楽しめる空間であり、興味をもってやってきた日本人幼児がゆったりと関わられるように期待できる空間としているのです。「サポート室に行ってみたい」「(外国人幼児の)○○ちゃんと遊びたい」「○○先生とお話したい」など、いろいろな思いをもっている日本人幼児もいますので、サポート室に行くことができる日を、学級ごとに決めていたとのことでした。

このように、外国人幼児等が安心して園生活を楽しめるようにするためのサポート室を設定するだけでなく、その部屋で外国人幼児等と日本人幼児が豊かな関わりができるよう、様々な視点から配慮されていることが分かります。

〈問い・話し合いたいこと〉

Q1 外国人幼児等がリーダー役になれるゲームを考えてみましょう。

- 外国人幼児等が夢中になって遊べるゲームとして、どのような遊びが考えられますか。
- 周囲の幼児にとってどのような意義がありますか。

【ファシリテーションのポイント】

- ・ 担任に対して、外国人幼児等の背景や発達の様子などを説明してもらったところから始めます。そして、ファシリテーターは「〇〇ちゃんは、ルールが分かっているみたいね」と担任の話を受け止めたり、「〇〇ちゃんが体を動かしながら、△△ちゃんと嬉しそうにしていたけれども、他の先生方も、〇〇ちゃんが嬉しそうな姿を見ていたら教えて」と問いかけたりして、幼児の特性や発達の状況について保育者間で情報を共有できるように進めます。
- ・ 「〇〇ちゃんは、こういう遊びが得意みたいだし、掛け声が楽しいのかも」「保護者も招待して母語を使った遊びを一緒にやってもらった方が自信につながるかな」など、一人一人の幼児が安心して自分を出し、誇りを感じる体験になるか、内容・方法を確かめる問いかけをするとよいと思います。それによって、各保育者がそれぞれの幼児の特性や年齢、発達に対応した遊びの大切さに気づき、遊びのヒントが生まれると考えられます。
- ・ 外国人幼児等だけでなく、学級の他の幼児にとっては、日頃の外国人幼児等の戸惑いに気付くことにつながることを確認し、常に、外国人幼児等にとっての意義と日本人幼児にとっての意義を見つめながら保育を構想することの大切さに気付かせたいものです。
- ・ 各園の実情によって、必要な援助は異なります。先進的な試みを参考にしながら、常に自園の幼児たちにとって意味のある取組を考えるように園内研修を進めてください。

2 違いを知り、受け止め合う環境の構成と援助の工夫

2-1 互いの国や文化に親しむ事例

2-2 日本の文化に親しむ事例

2-3-1 幼児期ならではの言葉を育む環境例

- 言葉への興味を引き出す環境

2-3-2 - 親しみやすく分かりやすい表記・文字環境

2-4 言葉に親しみ育む環境

2-5-1 幼児の遊びに寄り添いながら行う援助

- 通訳や日本語サポーター（ボランティア）等の活用・役割について

2-5-2 - 日本語サポーターと保育者の連携・協働の重要性

2-6 幼児期における日本語を育む援助のポイント

ここでは、様々な環境で育ってきた外国人幼児等と日本人幼児が、互いの国の言葉や文化の違いを知ったりよさを感じたりしながら、互いの生活等に関心を持ち、受け止め合える環境の構成について積極的に取り組んでいる園の様子を具体的に紹介します。何を目的として、どのように環境の構成を考え、保育を展開しているのかを読み取っていただき、各園の実情に即して工夫できるよう園内研修で考えていただきたいと思います。

2-1 互いの国や文化に親しむ事例

最近では、様々な国から幼稚園等に入園する外国人幼児等が増えてきています。日本人幼児と外国人幼児等が互いに関心をもつ中で、相手の言葉や文化、考え方を尊重する心が芽生え、このことが自国に対する誇りや自尊感情につながっていきます。

例えば、動画で紹介した外国人幼児等を数名受け入れている園の玄関ホールには大きな掲示板があり、そこには在籍している外国人幼児等

の国の位置を示す地図が書かれています。さらに、そこには「おはよう」「さようなら」「ありがとう」の言葉をそれぞれの国の文字で示し、読み方をひらがなで表示してあります。この園では、外国人幼児等の保護者に協力を求めて、文字を書いてもらってこの掲示板を作りました。保護者等と連携するよい機会にもなったと思います。この掲示板があることで、興味をもった幼児がいろいろな国の言葉で挨拶をする姿が生まれます。どのような掲示板を作るとよいのか、各園で話し合うことで職員間の多文化共生への意識が高まると思います。

また、互いの国の遊び文化を伝える機会もあれば嬉しいですね。例えば、独楽は多くの国で遊ばれている玩具です。保護者に園に来ていただき回し方を教えていただくこともできます。

2-2 日本の文化に親しむ事例

2-2 日本の文化に親しむ事例

・盆踊り楽しかったね


園のお祭りでも踊りたい!

浴衣を着て踊ったよ

日本文化の紹介の中で大切にしたいこと

- ・盆踊りを地域の人たちと踊る楽しさ、皆が楽しみにしている地域の祭りなど、紹介しながら、地域が大切にしていることを自分たちも楽しみに待ち、共に楽しむ体験にしたい。
- ・外国人幼児等の保護者も共に楽しめる機会を作るのも良いと考えられる。
- ・相手の言葉や文化、考え方を尊重する心の芽生えにつなげたい。

赤ちゃんのお母さんだよ。お菓子、早く食べたい。




(ままごとでおせち料理を作って食べている幼児たち)

日本の文化を地域の人々と一緒に楽しんだり、保育に取り入れて遊んだりする体験の中で、日本の文化に関心や愛着をもつきっかけになると思います。日本人幼児にとっても非日常的な感動体験ではありますが、外国人幼児等や保護者にとっても日本の文化を知り、共に楽しむ機会になります。

例えば、どの国にもお正月文化があります。日本のしめ縄づくりやおせち料理はままごと遊びの中で取り上げることができます。着物を着て、双六やかるた遊び・羽根つきなどのお正月遊びをしたりして楽しんでよいでしょう。

2-3-1、2-3-2 幼児期ならではの言葉を育む環境例

言葉への興味を引き出す環境

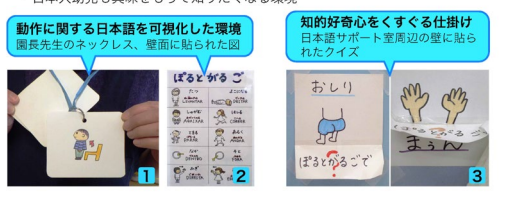
親しみやすく分かりやすい表記・文字環境

2-3-1 幼児期ならではの言葉を育む環境例
—言葉への興味を引き出す環境—

- ・興味をもって問いかけたくなるコミュニケーションのきっかけづくり
- ・日本人幼児も興味をもって知りたくなる環境

動作に関する日本語を可視化した環境
園長先生のネックレス、壁面に貼られた図

知的好奇心をくすぐる仕掛け
日本語サポート室周辺の壁に貼られたクイズ

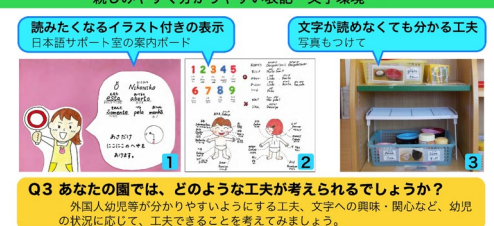


2-3-2 幼児期ならではの言葉を育む環境例
—親しみやすく分かりやすい表記・文字環境—

読みたくなるイラスト付きの表示
日本語サポート室の案内ボード

文字が読めなくても分かる工夫
写真もつけて

Q3 あなたの園では、どのような工夫が考えられるでしょうか?
外国人幼児等が分かりやすいようにする工夫、文字への興味・関心など、幼児の状況に応じて、工夫できることを考えてみましょう。



外国人幼児等にとって言葉が分からないと、話をしたくてもどう表現すればよいのか分からず不安です。日本人幼児にとっても、相手に思いが通じずもどかしさを感じるようになります。動画に示されているように、各園では幼児期ならではの言葉を育む環境として、動作と言葉を示す表示やカード・知的好奇心をくすぐる仕掛けのあるクイズ・自分の気持ちを伝える表示・道具の位置や片付け方が分かる表示等が工夫されています。

大切なことは、言葉への興味・関心を広げ、その言葉で表現する楽しさや、気持ちや思いが

伝わる喜びを感じることで。各園で言葉を育む環境を工夫することで、外国人幼児等が分かりやすい環境は勿論ですが、日本人幼児の文字環境への意識も高まると思います。

あなたの園では、外国人幼児等が分かりやすいようにする工夫、文字への興味・関心など幼児の状況に応じて工夫できることを考えてみましょう。

2-4 言葉に親しみ育む環境

2-4 言葉に親しみ育む環境

- ・外国人幼児等が安心して学級の中で過ごせるように、なじみのあるものが思い起こせる環境
- ・自分が学級の中で受け止められていると感じる環境
- ・ゲーム感覚で問いかける仕掛けのある環境
- ・繰り返し楽しめる掲示板や表示の工夫
- ・在園している外国人幼児等が親しみやすい遊びや絵本など、幼児が手にしてみたい環境
- ・外国人幼児等も日本人幼児も、興味をもった時に、自分から関われる環境
- ・日本の文化に親しむ場や、外国人幼児等と日本人幼児とが話題にしやすい文化・情報を含んでいるものや文字環境

ここでは、言葉に親しみ育む環境例や幼児期における日本語を育む援助のポイントをまとめています。動画でも示されているのですが、外国人幼児等は、日本語が分からない・環境が違う・知っている人がいない中で不安に感じていることを理解し、何よりも温かな雰囲気の中で、ほっとするような場所や物が必要です。外国人幼児等にとって馴染みのあるキャラクターなどがあり壁面や掲示板にも母語と日本語

で表示されていると、ほっとして保育者にも親しみを感じてきます。

2-5-1、2-5-2 幼児の遊びに寄り添いながら行う援助

通訳や日本語サポーター（ボランティア）等の活用・役割について

日本語サポーターと保育者の連携・協働の重要性

2-5-1 幼児の遊びに寄り添いながら行う援助
 ー通訳や日本語サポーター（ボランティア）等の活用・役割についてー

通訳や日本語サポーター（ボランティア）
 幼児の遊びに入り、その場の状況に応じて通訳をしたり適切な日本語の表現を伝え、コミュニケーションをサポートする人が数時間配置される地域もあります。ボランティアが入る園もあります。その活用・役割について考えます。

事例「やめて」

日本語サポーター（通訳）

2-5-2 幼児の遊びに寄り添いながら行う援助
 ー日本語サポーターと保育者の連携・協働の重要性ー

日本語サポーター（通訳）の役割

- ・A児に寄り添いながら、周囲とのコミュニケーションで戸惑っていたら通訳する。
- ・A児の日本語が相手に通じていない時には、適切な言葉に言い換えてA児の思いが伝わりと同時に、A児にとっては表現のモデルとなるようなタイムリーな関わりをする。
- ・A児の思いの読み取りは、サポーターの感性+担任保育者との連携・協働する。

外国人幼児等が在籍する園には、通訳が派遣されている地域や日本語サポーターとしてボランティアが協力している園など、地域や園の実態によって異なります。また、それぞれに求められている役割も違います。手紙などの翻訳、保護者等の面談の際の通訳、幼児たちの遊びに参加し、その場の状況に応じて適切な日本語の表現を伝えコミュニケーションをサポートする通訳の人など支援の内容は異なります。

特に、コミュニケーションをサポートする通訳等の支援が得られる場合には、通訳してくれる人が付いているからということなので安心して任せきりにするのではなく、日本語サポーターや通訳等の役割を意識化することが大切です。そして、保育者は、通訳等と幼児たちの様子について話し合う機会をもち、連携・協働し、幼児たちに寄り添いながら必要な援助ができるよう

にしたいものです。

ここでは、通訳や日本語サポーターが配属されていない園で、保育者が幼児の思いを保護者に確かめようと積極的に問いかけている実践例を紹介します。

事例 —外国人幼児の言葉が分からず推測した理解の確認—

《宝物づくり》

外国人幼児B児がビー玉をティッシュと金紙に包んで「宝物」を作った。B児は、宝物を差し出しながら嬉しそうに「クスリ」とか「グスル」とか言っているように聞こえるが、保育者にはよく分からない。B児はその宝物の中に何かを入れたと言っているようだが保育者はよく受け止められず、B児は喜びが保育者に伝わらずもどかしい表情になる。



(金紙の宝物)



(保護者との対話)

保育者も、B児がせっかく嬉しそうに話しかけてきたのに受け止められないもどかしさを感じていたが、B児がビー玉を持っていたことを思い起こし、「宝物にビー玉を入れた」と言いたかったのかと推測した。

そして、降園時にB児の保護者にその様子を話してB児の思いを確認したところ、その通りであることが分かった。保育者は、B児が何を伝えたかったのか、喜んでいて分かった！と嬉しくなり、B児が宝物を作ったとても喜んでいた様子を保護者に伝え、保護者と共に喜び合った。

この事例で大切なことは、「B児が一生懸命に話しかけてきたことは、何だったのか分かった」という保育者の心もちです。言葉が理解できるということは、保育者とB児が分かり合える瞬間であり、心が通う瞬間でもあります。この事例の場合、日本語が通じる保護者でしたが、日本語が分からない保護者の場合どうすればいいのでしょうか。周囲の同じ言語の保護者が助けてくれることもあります。保護者同士の助け合いを引き出す機会になるかもしれません。

2-6 幼児期における日本語を育む援助のポイント

2-6 幼児期における日本語を育む援助のポイント

- 日本語を育む援助は、特別な時間や場を設けて行うのではなく、外国人幼児等が興味をもった時や日本語を話そうとした時に**タイムリーに援助**する。
- 外国人幼児等が日本語で話そうとしているけれども表現できずに言葉を探している時には、幼児が言おうとしていることを**推測して話しかけたり問い返したり**して、保育者の「**分かりたい気持ち**」が伝わるようにする。
- 日本語通訳者等（ボランティア等も含む）が、外国人幼児等の**遊びの中に入り込みながら選択**する場合には、幼児の言葉を通訳するだけでなく、場面に応じて、**外国人幼児等が日本語で表現できない思いを推測して言語化**し、その反応から適切に伝わっているかを確認しながら援助していく。
- 担任保育者は、日本語通訳者等に任せきりにするのではなく、外国人幼児等と日本語通訳者等の関わりに着目し、**どのような状況の時にどのような日本語のモデルを示してほしいか**を伝え、連携・協働しながら進める。

保育者自身も言葉が分からないことや伝わらないことへの苦労はありますが、何よりも外国人幼児等のことを「分かりたい」という保育者の気持ちが、相手に伝わります。それによって、外国人幼児等がホッとすることもなります。また、伝わっていく姿を見ている日本人幼児たちにとっても、外国人幼児等に心を寄せ、コミュニケーションを図ろうとするようになるの

です。

日本語通訳者等（ボランティア）とも連携・協働を図りながら進めることにより、その姿が保護者にも伝わり協力が得られるようになります。外国人幼児等が在籍するよさが学級の中で生かされるようになるための環境や保育者の援助について、話し合ってください。

〈問い・話し合いたいこと〉

Q2 掲示板の事例の園では、外国人幼児等の保護者に協力を求めて掲示板を作りました。皆さんだったらどのようにして作りますか？

Q3 幼児期ならではの言葉を育む環境について、あなたの園ではどのような工夫が考えられるでしょうか？

◎また、幼児の遊びに寄り添いながら行う援助について考えましょう。

【ファシリテーションのポイント】

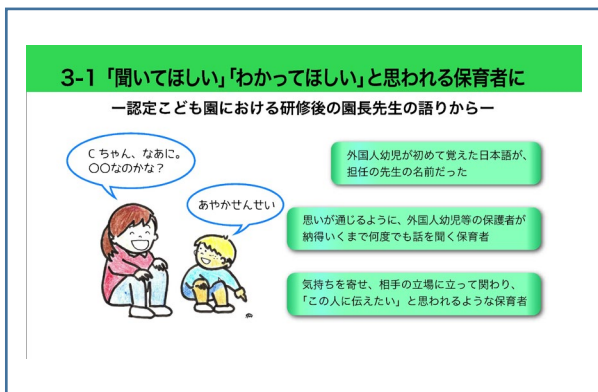
- ・ まず、外国人幼児等の背景・発達の様子・日本語の理解の状況などを担任から説明してもらい、その幼児への理解を保育者間で共有していきます。その時ファシリテーターは、「〇〇ちゃんは、歌が好きなようね」「〇〇ちゃんの国では、〇〇というキャラクターが人気なんですって」など、外国人幼児等の興味・関心や国の特色などの話題から進めていきます。情報を共有しながら日本人幼児も含め、どのような内容に興味があるのか共通点を探し、互いを理解し合える環境について考えていきます。そして次第に、情報環境としての掲示物等について、何を掲示することで幼児が互いの言葉や文化に関心をもつのか、保育者の意見を引き出しながら、まとめていきます。
- ・ 言葉を引き出し育む環境について、動画の中で紹介されている具体例について話し合うのもよいと思います。その時ファシリテーターは、それぞれの環境の目的と工夫点についてまとめるようにすると、何のためにどのような工夫がされているのかが分かりやすくなり、「自園でも〇〇ができるよね・〇〇作ろうか」というような新しい発想が生まれると思います。
- ・ 幼児の遊びに寄り添いながら行う援助については、各保育者が感じたことを話し合ってみてください。保育者が幼児の気持ちを推察することの大切さや通訳・日本語サポーター等の役割が見えてきます。
- ・ 自園の実情に応じて、どのような援助が必要なのか、通訳等だけでなく、担任同士も連携しながら保育をどう進めるのかなどを話し合い、次第に幼児の遊びに寄り添いながら行う援助について大切にしたいことに気付いていくように園内研修を進めてください。

3 外国人幼児等を受け入れている 保育者たちの語りからの学び

- 3-1 「聞いてほしい」「わかってほしい」と思われる保育者
- 3-2 「だめ」という言葉は使わないで
- 3-3 様々な感情や状況を表現する言葉に触れる経験

本研究では、多くの外国人幼児等の受入れをしている地域の幼稚園・こども園や NPO などを訪問し、外国人幼児等の受入れについて、環境の工夫や支援の方法等を伺う中で、保育者や支援を行っている方々から、沢山の示唆をいただきました。ここでは、その中で、外国人幼児等を受け入れるにあたって、大切にしたいことをあげています。これらの語りを参考にしながら、各園の実情に即して工夫できるよう、園内研修で考えていただきたいと思います。

3-1 「聞いてほしい」「わかってほしい」と思われる保育者



外国人幼児等を受け入れた際に、言葉が通じないことは保育者にとって、一番、頭を悩ませることかもしれません。しかし、外国人幼児等をたくさん受け入れてきた園の園長先生のお話によると、自園の2歳児の外国人幼児が初めて覚えた日本語が、担任の保育者の名前「あやか先生」だったということでした。

「あやか先生」は、この幼児にとってどんな意味があったのでしょうか？きっとこの幼児

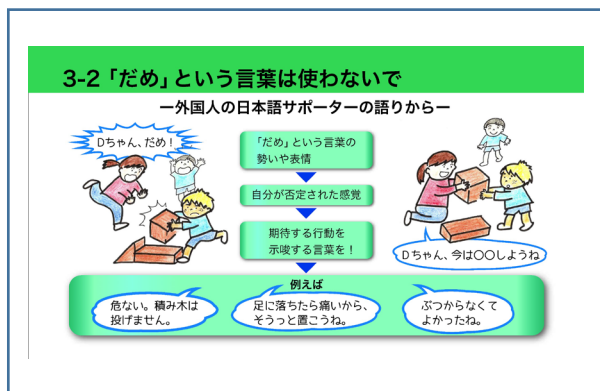
は、まず「あやか先生～」と担任の保育者に声をかけ、自分の言いたいことを母語や手振り身振りで話しかけていたのでしょう。「あやか先生」なら、何でも受け止めてくれるという安心感があり、自分の思いを「聞いてほしい」「わかってほしい」と思うからこそ、自分から話しかけ、保育者とやりとりをしながら生活に必要な日本語を覚えていったのです。

園長先生は基礎理論研修を実施したときに、「言葉を覚えていくには、『伝えたい人がいる』『伝えたいことがある』ということが大切である」という解説を聞いて、「その意味が分かった」と、感じたそうです。

また他の地域の園長先生が、「保護者が納得いくまで、その方のお話を聞くように心掛けていました」と話されていたことも、この事例と一致するところです。

皆さんの園の外国人幼児等は、園に登園したときにどのような気持ちでいるのでしょうか。どのような関わりで、心を開き、保育者に聞いてほしいという気持ちをもってくれるのでしょうか。園内で一人一人の様子について話し合ってみましょう。

3-2 「だめ」という言葉は使わないで



これは、子供時代に来日し、現在外国人幼児等の日本語のサポートをしている外国人の方ご自身の経験からの語りです。

外国人幼児等が危ないことをしている時に、つい「だめ」という言葉を言ってしまいがちですが、この言葉は使わないでほしいと話されました。なぜかという、当時「だめ」という言葉が分からず、その勢いと表情から、自分が否定されていると感じたそうです。

そんなつもりで言ったのではないけれど、「だめ」という言葉が人間的に否定されたと感じられたとしたら、考えなければいけないですね。例えば、カバンを掛けたまま滑り台を滑ってしまうなど、命に係わるような危険な行為は、当然止めなくてはなりません。保育者は、日本語で幼児に分かるように説明はできますが、外国人幼児等の母語で説明することは難しいことが多いと思います。ですから「だめ」と強く制止するのではなく、「○○すると、怪我をする」ことなどについて、外国人幼児等にも分かるようにジェスチャーや表情を工夫して伝えていくことが大切です。

このスライドでは、積み木遊びをしていた幼児が、自分が考えていた構成と違っていたので、何も言わずに上の積み木を崩そうとしています。こんな時、「だめ」という言葉でなく、なんとという言葉が掛けたらよいのでしょうか。

まずは、行動を止めさせるように「危ないから積み木は投げません」という言葉だとどうでしょう。同じ制止する言葉でも「○○しません」と、行動のみを制止するような言葉の方が分かりやすいような気がします。また「○○ちゃんにぶつからなくてよかった」などのように相手を心配している言葉であれば、否定されたとは思いません。言葉が分からなくても、その裏にある感情や気持ちが伝わるものなのです。

話している言葉が分からなくても、相手を尊重し、否定せずに知らせていくという姿勢や保育者の言葉の使い方は、日ごろの保育でも留意していくことが大切であると思います。

3-3 様々な感情や状況を表現する言葉に触れる経験



これはNPO法人で、外国人のサポートとして通訳・相談員をしていた方から伺ったお話です。

幼児教育を担う保育者へのアドバイスとして、「自分の考えや感情を表す言葉がたくさん出ている絵本や気持ちを説明する言葉が出てくる絵本をたくさん読み聞かせてほしい」と話されました。この方は、中高生にも接していて、外国人が理解できる日本語が増えていっても、感情を表す言葉の感覚が伝わりにくいと感じ

たそうです。そこで、幼児期から絵本やお話を通して、より豊かな日本語の感情を表現する言

葉にたくさん出会わせてほしいとおっしゃっていました。

スライドにあるように、例えば「おじいさんががっかりしてしょんぼりと帰っていきました」のように心情を表すような言葉が出てくると、外国人幼児等は言葉が分からなくても、絵本のおじいさんの絵の表情や読み手の言葉の調子やニュアンスから、登場人物の気持ちを察していくことができます。絵本は、何度も読んでもらったり、自分で手に取って、繰り返しお話の世界に触れたりしていくことができますから、お話の世界で様々な感情に出会い、その気持ちや状況を想像することで、日本語の感覚を培い、豊かな感性を育てていくことにつながるのだということを伝えてくださったのです。絵本だけでなく素話や紙芝居などもあります。また、読み聞かせ等の場面だけでなく日常生活の中でも、保育者が状況に合わせて、相手の感情を表す言葉や様々な言い方を使って話しかけることによって、日本語の感情表現から外国人幼児等一人一人の感覚や感性を豊かに育みたいものです。

〈問い・話し合いたいこと〉

Q4 保育者等の語りから学んだことを話し合ってみましょう。

- 自園の外国人幼児等が心を開き、先生に「聞いてほしい」と思うようになるためには、どのような関わりをしたらよいでしょうか。
- 外国人幼児等の行動をとっさに止めなければならないような状況の時に、どのように接していますか。豊かな日本語に触れるような関わりをしているのでしょうか。振り返ってみましょう。

【ファシリテーションのポイント】

- ・ 事例を参考に、保育者が外国人幼児等にどのように関わっているか、あらためて保育を振り返る機会にしていきましょう。ファシリテーターは「○○のような場面で、どんな言葉を掛けているかしら」と、担任が自身の関わり方を振り返ることができるように問いかけてみましょう。
- ・ 一人の発言を受けて「その関わり方って、○○ちゃんにはどう伝わっているのかしら」などと問いかけ、幼児が安心する言葉掛けや関わり方について皆が考えを出し合えるように進めていきましょう。答えは一つではなく、保育者一人一人が幼児の思いを推測し思いを巡らし、考えを深めることに意味があります。
- ・ 豊かな日本語に触れるような経験というとな難いようですが、どのような絵本やお話を取り上げるとよいかを出し合ったり、日常にある場面を想定し、「他にどのような言い方があるかしら」と考え合ったりしてもよいと思います。このことは、外国人幼児等だけでなく、学級の他の幼児にとっても、語彙を増やし、豊かな伝え合いにつなげていくことになります。

園内研修の実効性を高めるために 園内研修の振り返り

在園している外国人幼児等が安心して園生活を送るための環境の構成や保育のヒントが、この研修の中で、見つかったでしょうか？

ここでは、これまで学んだことを総合して考え、実効性を高める視点から振り返りましょう。園内研修の中で、保育者が動画を見て感じたこと考えたこと、皆で具体的な環境の構成や援助について検討したことなど、学んだことを振り返ることによって外国人幼児等の受入れの中で、大切にしたいことを意識化してください。それによって、保育者自身が、多様な考え方を受け止める大切さに気付き「変わる力」や、研修で学んだことを自園の実情に照らして考え保育を「変える力」を身に付けることにつながります。

園内研修の実効性を高めるために

—在園する外国人幼児等の実情に即した保育の実現—

保育者自身が多様な考え方を受け止める大切さに気付き「変わる力」や、研修で学んだことを自園の実情に照らして考え保育を「変える力」を身に付けるために

実効性を高めるための視点

- ・外国人幼児等の発達や文化的・言語的背景など、全体が見えているか
- ・保護者が何に戸惑っているのか、保護者のニーズを把握しているか
- ・市町村（行政）が行っている外国人幼児等に対する支援体制を理解し、適切に活用しているか
- ・地域の人材や支援団体の得意としていることを理解し、適切に活用しているか
- ・通訳や日本語のサポート等をしてくれる方々や団体等に対して、個人情報の保護の観点から適切に対応しているか

Q5 上記の視点から、これまでの実践について振り返ってみましょう。

実効性を高めるための視点について

- ・外国人幼児等の発達や文化的・言語的背景など、全体が見えているか

一人の外国人幼児等の発達や特性だけでなく、学級の幼児たちの関わり方、家庭で使っている言語や生活習慣、地域とのかかわりの状況、今後の日本における生活の予定（進学予定などを含む）などについて把握する必要があります。なぜならば、幼児の家庭や地域など幼児を取り

巻く環境やその関係性を考えながら進めることによって、当該の外国人幼児等やその保護者にとって必要な支援の内容や方法が分かり、実効性が生まれるからです。

- ・保護者が何に戸惑っているのか、保護者のニーズを把握しているか

思っていることを正確に日本語で表現することは、ほとんどの外国人幼児等の保護者にとって困難なことを念頭に置くことが大切です。保育者が何か説明した後に、「何か、困ることは、ありますか」と尋ねても、うまくニーズを表現できない保護者は、「大丈夫」ということがあると聞きます。本当は、何に戸惑いどういうニーズがあるのか、それは園内で対応できるか、どこに支援を求めればよいのか、推察する姿勢を常にもってほしいと思います。

- ・市町村（行政）が行っている外国人幼児等に対する支援体制を理解し適切に活用しているか
市町村によって外国人幼児等に関する支援体制は異なります。自園の地域の行政機関が外国人幼児等の教育に関する支援をどのように行っているかを知ることが大切です。そして、幼児に関するだけでなく、外国人家庭が日本における生活の仕方等、困っていることに対する支援や異文化交流等、外国人幼児等の家庭・地域の生活全体に目を向けていくことも大切です。
- ・地域の人材や支援団体の得意としていることを理解し、適切に活用しているか

地域の人材や支援団体は、それぞれの得意とする分野があると思いますので、相談しながら

支援が得られるかどうかを見極めることが大切です。園はどのような支援を求めているのかが相手に伝わるようにして、適切に支援を求められるようにしたいものです。

・通訳や日本語のサポート等をしてくれる方々や団体等に対して、個人情報の保護の観点から適切に対応しているか

園や地域には、外国の言語や文化に精通している方もいらっしゃると思います。その方々に力を発揮していただく際には、個人情報の保護に対する留意が不可欠です。特に保育に入って通訳のお願いをするときには、幼児に関する個人的な情報などをどこまで伝えるか、当該幼児の保護者との共通理解が必要です。また、周囲の幼児に関する個人的な情報に触れることもありますので、秘密の保持についての確認をしておくことも大切です。

こうした基本的な方針について園内の教職員全員が共有すること、支援してくださる方の理解を得て思いを共有することなどについて、適切に対応しているかを確認することが肝要です。

〈問い・話し合いたいこと〉

Q 5 園内研修の実効性を高める視点に照らして、これまでの実践について振り返ってみましょう。

【ファシリテーションのポイント】

- ◎ もし、皆さんの園内研修が、本プログラムによるテーマ別研修の最後の回の園内研修ならば、これまで4つのテーマ別研修で、たくさんのお話を話し合ったと考えられますので、たくさんのお話を学んだねという達成感を味わえるように進行していただきたいと思います。
 - ・ 実効性を高める視点に照らして課題を発見することも大切ですが、「知らないうちに、こういうことも考えていたんだ」と自分たちが学んだことを意識するきっかけにすることも大切にしていきたいと思います。
 - ・ そして、「幼児教育の基本と同じと感じた」「この考え方が、自分の保育を捉え直すことにつながった」など、自分自身が変わってきていることへの気づきや、これからもっと考えてみようというような「保育を変える力」につながる方向で、達成感を味わっていただきたいと思います。
- ◎ もし、皆さんの園内研修が、本プログラムによるテーマ別研修の初めての回の園内研修ならば、「こういうことも考える必要があるのね」というような感想を受け止め、他のテーマ別研修に興味を広げられるような進行をするとよいと思います。そして、別のテーマも見てみたいという動機付けにしていいただければ、きっと保育者の主体的な学びが生まれると期待しています。